

JOMF 派遣医師便り (2015. 7)

◆シンガポール◆

デング熱～当院で診療した症例から

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

2001年から2012年までにシンガポールで確認されたデング熱の年間平均患者数は6,050人でした。これが、2013年には22,190人まで急増し、2014年にも18,157人の患者さんが見られました。このほかにこの2年でデング出血熱(≒重症デング)の方が113人見られ、うち死亡者13名でした。亡くなられた方々の内訳は20歳代が1名、40歳代が1名、50歳代が3名、60歳以上が8名で全体の60%を越えており、高齢者が多いという結果でした。ちなみに、今年の患者数は6月末で5,000人を越えています。

これまで過去10年に当院で経験した症例を検討してみました。

臨床経過の特徴として、初発症状としては、発熱が72%。頭痛36%、吐き気、むかむか感が20%ほどでした。初発症状が出てから平均2日ぐらいで、受診され、その時(つまり初診時)までに発熱、頭痛はほぼ100%、消化器症状、痛みも80%近くの例で認められるようになっていました。主な消化器症状は嘔気、むかむか感、下痢でした。痛みは、筋肉痛、関節痛、部位も背中、全身、大関節とさまざまで、また、それらが同時にまたは少し時間をたがえて発現します。症状は数日続きます。

強い倦怠感が表れてくるのも特徴の1つだと思います。初診時までにほとんど全ての症例に見られます。病初期の方が倦怠感はより強く、解熱する頃までにある程度軽快しますが、解熱後、一週間してもだるさが残った例が60%以上ありました。

強い倦怠感は、典型的なインフルエンザでだるさが強い場合と似ています。デングに限らず、熱性ウイルス性疾患に共通して見られる症状かと思います。

これもあくまでも当院での例ですが、熱の特徴は、最高体温の平均は39.0℃で、有熱日数は平均6日ぐらいでした。ただ、解熱薬がほぼ全例で使用されており、外来診療例が多いため、真の最高体温はさらに高い可能性が強いと思います。熱はしつこく、解熱剤の効き目が悪いように感じます。

発疹は5割強の方に現れていました。患者さんの申告に基づきますと、発熱から出現までの日数は4日(中央値)ほどでした。

血小板は、初期の2、3日で急激に下がり、その後、下がるスピードが緩み、解熱後ほど

なくして最低値が来るという例が多いようです。

デング熱は、シンガポールにおいては、外来で診ていくことが可能であると思いますが、重症化のサインを見逃さないため、頻回の来院が必要だと思えます。

当院の症例の中で入院例は過去 10 年で 6 例でした。血小板数低下などを理由に、入院になりましたが、うち 5 例は安静、経過観察のみで軽快しています。血小板輸血に至った例は 1 例のみで、その後、全快されています。

多くは良性の経過をたどり回復しますが、重症化し死に至ることもありますので、皆で十分に注意していきましょう。